

令和4年度第2回市民活動センター評価委員会 摘録

日 時：令和4年6月22日（水）午前9時15分～12時12分

場 所：京都市市民活動総合センター ミーティングルーム

出席者：

（委員、敬称略） 中井 歩（京都産業大学法学部教授）<委員長>
東郷 寛（近畿大学経営学部准教授）<副委員長>
鈴木 ちよ（市民公募委員）
船井 大治（公認会計士）
森本 純代（一般財団法人藤野家住宅保存会理事）
※伊豆田委員は欠席

（事務局） 京都市文化市民局地域自治推進室

地域コミュニティ活性化
・北部山間振興部長 廣瀬 智史
市民活動支援課長 永田 彰
市民活動支援係長 岡部 麻紀
担当係長 別所 隆男
担当 高山 玲子、岩沢 真梨絵

傍聴者：3名

取材者：なし

議 事：（1）京都市市民活動総合センター第5期指定管理者募集要項等の審議
（2）令和3年度市民活動総合センター事業の報告
（3）令和3年度いきいき市民活動センター事業の報告

開催概要

1 開 会

2 議 事

（1）京都市市民活動総合センター第5期指定管理者募集要項等の審議

「京都市市民活動センター第5期指定管理者募集要項」（案）について、事務局から、前回委員会からの変更点について説明を行った。委員からの修正意見はなかったため、今後、事務局において手続を進めることとなった。

なお、市民活動総合センター（以下「しみセン」という。）及びいきいき市民活動センター（以下「いきセン」という。）の関係について、委員から次の意見が述べられた。

（委員）

総合センターといきいきセンターは、それぞれが独立した施設としてフラットな関係にあることは理解しているが、市民活動の活性化という共通した目標の達成のため、互いに連携する必要があることは確認しておきたい。

(2) 令和3年度市民活動総合センター事業の報告

市民活動総合センターが令和3年度の実施事業について報告を行い、報告に関し、委員が質疑を行った。

(委員)

運営方針「4. 社会関係資本の再構築と受信力の向上」、「6. G（ガバナンス）・C（コンプライアンス）・D（ディスクロージャー）の推進」及び「7. 第三者評価・支援機関の設置と提言」は、それぞれどの事業に対応しているのか。

(しみセン)

運営方針4の「社会関係資本の再構築」については、地域とNPOをつなぐことにより、それぞれが持つ資源を活かした取組の実施を促進している。「受信力の向上」は、市民公開講座に対応しており、情報の受け手の感度や関心を高めることを目指している。NPO自身の発信力向上も必要だが、情報を受け取る側に引っ掛かりを持ってもらうことも重要だと考えている。

運営方針6については、しみセンや指定管理者であるきょうとNPOセンター自身のG（ガバナンス）・C（コンプライアンス）・D（ディスクロージャー）を推進するとともに、各種講座や専門家相談会の実施により、各市民活動団体が適切な運営ができるよう支援している。

運営方針7は、「京都市市民活動センター運営委員会」を指している。運営委員会は、市民活動団体、学識経験者、行政職員等で構成された組織であり、しみセン事業に対して意見や助言等をいただくほか、ともに事業を実施することもある。

(事務局)

第三者機関の設置については募集要項に規定しており、しみセンの運営に対する意見陳述や事業への参画を求めている。なお、次期募集要項にも同様の記載をすることとしている。

(委員)

オンラインでの相談やイベントを積極的に実施しており、時間や場所にとらわれない参加が可能となっている。一方で、オンラインでの相談件数は伸び悩み、対面での実施を希望される団体も少なくない。オンラインでの実施について、労力に見合った効果は得られたと考えているか。実態を踏まえ、今後はどのような方針で実施していくのか。

(しみセン)

メンバーが離れた場所にいるなど団体の形態は多様化しており、利用件数は伸び悩んでいるものの、オンラインのニーズは一定あると考えている。オンラインの利用実績を伸ばすことに注力する必要はないが、希望があった場合に対応できる環境は整えておきたい。

なお、コロナ禍以降、しみセンは全国的に見てもオンライン環境を迅速に整えた施設であり、ひと・まち交流館の会議室より通信環境が良いことから、しみセンを利用される団体もある。各団体の活動を広げるサポートができており、しみセンにおいてオンライン環境を整えておくことには意義があると考えている。

(委員)

市民活動においては、地域との連携が重要になってきているが、運営委員会のメンバーに地域の方を入れることは考えているか。

(しみセン)

現在の委員に地域の代表者はいないが、まちづくりアドバイザーなど、地域で活動している方も委員となっている。そのような方たちを通じ、地域の視点を取り入れることができている。

(事務局)

運営委員会は、公設市民営のコンセプトの下、利用者ニーズを取り入れながらよりよい施設を目指すために指定管理者に設置を求めている第三者機関である。市民活動団体や企業の代表者のほか、学識経験者、行政職員等で構成されており、各委員の意見をしみセンの運営に活かしている。

(委員)

年度途中にスマートオフィスを退去されている団体があるが、どのような理由で退去されたのか。

(しみセン)

現在、スマートオフィス入居団体は年4回募集しており、利用期間は1年間、通算3年まで利用できる。ほとんどの団体は3年間利用されており、途中退去したわけではない。例外的に、各地を移動しながら活動されている団体が京都で活動している期間のみ入居したいという希望があり、当初から短期間の予定で入居されたものがある。

(委員)

専門家相談会は貴重な機会であるが、残念ながら利用件数は低迷している。利用可能性のある団体がコロナ禍2年目で現場の対応に追われ、利用する機会がなかったと推測されているが、これを踏まえて今後はどのような方針で実施するのか。

(しみセン)

個別に相談を受けた際に専門家相談会の利用を促しているところだが、もっと利用したいと思ってもらえるような情報発信ができるよう工夫したい。

(委員)

専門家相談会は市外等からのニーズもありそうだが、オンラインで実施することは難しいのか。

(しみセン)

相談する側が高齢でオンラインに慣れていない、通信環境が不安定になる場合がある、対面に比べ資料共有が難しいなどの理由から、オンラインでの相談会にやりにくさを感じているようである。こうした状況から、昨年度のオンライン相談は3件のみにとどまっている。

(2) 令和3年度いきいき市民活動センター事業の報告

指定管理者から提出された令和3年度事業報告書及び評価委員からの事前質問に対する各指定管理者の回答について意見交換を行った。

※ 活性化事業の予算については、例年であれば上限100万円のところ、令和3年度は2年度に引き続きコロナ禍のため大きなイベントの実施が難しい状況であることを踏まえ、50万円を上限として実施した。

<北いきいき市民活動センター>

(委員)

複合施設に移転したことにより当該施設に入居している他団体等と近くなったためと思うが、高齢者だけ、障がいのある人だけ、児童だけという区切りではなく、様々な地域の人が集まって丸っとやるという良さが出ているのがダイバーシティの面では良いと思う。近所に様々な人がいるということを知りあう場になれば、いきセンらしくて良いのではないか。

(委員)

特定の属性だけではなく、幅広く多様な人々や団体と連携していく、又連携する人々や団体が実行委員会に入り運営側として頑張っていただくというのは、これまでからこの委員会でお願いしてきたところである。

(委員)

1つの団体や属性に特化した人だけでやるというのも意義があるが、催しの内容自体も多様性があり参加しやすい内容になっている。実行委員会形式への移行に向けて取り組んでいる。スタッフ単位で見ても高校生、大学生がいる一方で視覚障害のある方がボランティアでスタッフに参加しているなど素晴らしい。このような実行委員会ができているというのは多様性を考えていくうえで良い試みであると思う。

ふれあい共生館に移転したことより建物自体に多様性、包摂性があるところに、位置的に近いからもあるが、大学生や高校生を取り込むなどの良い取組ができていると思う。

(事務局)

旧いきセンの頃から近くにあった保育所、児童館、ツラッティ千本とは連携していたが、移転してからふれあい共生館に入居している天才アート、HAPSも加わり月1回程度、各施設の管理者で情報共有等を行う連絡会議を開催していると聞いており、その中で生まれた事業もあると思われる。

(委員)

そういう意味でオンラインも大切であるが、物理的に同じ建物で同居している、顔を合わせることの良さ、オフラインの良さを感じる。

<岡崎いきいき市民活動センター>

(委員)

岡崎いきセンは、音楽が強みであるが、ここ数年は音楽以外の例えばまち歩きや社会包摂などの取組をやられている。強みから派生したリソースを生かして市民と社会課題を引き合わせるアートシンポジウムなどに取り組まれているが、コロナ禍で予定していた出演者がキャンセ

ルになるなど苦労されている中、YouTube の視聴件数が公開 6 日で 200 件以上と非常に高い関心を得られている。

(委員)

岡崎いきセンはセンターの外に出て行って地域とつながりを作っていく、いきセンを地域の人に知ってもらう、いきセンで活動している人達を地域の中で知ってもらう、若しくは活動に来ている人に岡崎のことを知ってもらう、岡崎いきセンのように自分から地域に出ていくというやり方も良いのではないか。

(委員)

岡崎のセンターは小さいが、近くにはロームシアターなどがあり、週末には何らかのイベントがある。これらのリソースを上手く活用しながら工夫しているのが面白いところといえるのではないか。

＜左京東部いきいき市民活動センター＞

(委員)

左京東部は近年多文化共生に関する事業に力を入れて取り組んでいる。左京区は外国籍の方の割合が多いが、以前の事業では実際のイベントに来られたのは他の地域の方がほとんどということもあったが、今回作成された冊子を見ると地元で活動されている外国籍の方や、外国籍の方を支えている方と上手く連携でき、冊子も立派に仕上がっている。外国籍の方への対応ということでいうと頼りにされてきているのかなという印象。国際交流会館とも連携しているので、上手くいっているのではないか。

(委員)

冊子を作ることにより繋がりができると感じる。

地域との連携について、外国人が多いにも関わらず、なかなか繋がることができていなかつたという課題については取り組めていると思う。

(委員)

いきいき春の文化祭で、ウェブでも開催したとのことであるが、アンケートの結果を見ると生のパフォーマンスが見られたということが特に子供には良い影響があったのではないか。こういう機会をいきセンで作れるのはコロナ禍であってもよかったですのではないか。

(委員)

コロナ禍でも過去最高の昨年度と同様の貸館利用件数は非常に優秀である。

(事務局)

貸館利用については、左京東部、西部は近くに大学が多いが、コロナ禍で大学が休校になり、大学の施設を使えないサークルなどの利用が一時的に増えたと聞いている。

(委員)

若い世代に施設の存在を知ってもらえたというのは、今後の利用に関しても良い影響といえるのではないか。

(委員)

コロナ禍がきっかけであったとしても、貸館利用により新たな繋がりができていきセンの事業への呼びかけのきっかけになるのであれば良い繋がりではないか。

＜左京西部いきいき市民活動センター＞

(委員)

養正市営住宅の歴史アーカイブ事業は、ジオラマの展示などもされているが、どのような経過で実施されたのか把握しているか。

(事務局)

養正市営住宅の歴史アーカイブ事業については、団地再生事業において老朽化した住宅が除却されていく中で、この地域にあるいわゆるスターハウス（全部屋が角部屋で上からみると星型に見える市営住宅）を地域の記憶として残していくという取組のひとつとして行政の担当課とも連携して行ったと聞いている。

(委員)

これまで同じ指定管理者ということで課題であった東西のすみ分けが今回でいえばできてきていると感じた。花灯籠についても地域住民を分散させる形でワークショップを開催している。ほかにも高齢者の支援として、地域の課題である独居老人の孤立を防ぐために地域の助け合いの会と連携して実施するなどしている。また、市営住宅のアーカイブ事業についても面白く、来場者のアンケートからはスターハウスという点から光を当てられていることで初めて市営住宅の面白味を感じたという声があり、私も同感である。地域の老朽化した施設は新しいものに再生する必要があるが、地域の歴史的遺産を、市民に広く知つてもらうとともに地域の記憶として残していくというのは、非常に良い取組と思う。これらの取組は、東西のすみ分けという観点からもオリジナリティが出てきてよいのではないか。

(委員)

左京西部はこれまで大規模な夏祭りを実施されていたが、まつり自体は「かもがわデルタフェスティバル」として実行委員会により自走化がされ、いきセンは支援を行うとともに灯籠のワークショップをデルタフェスティバルと同時期に行い相乗効果を狙うなど、良い展開がされている。

＜中京いきいき市民活動センター＞

(委員)

令和2年度事業では参加者が非常に少ないものがあったが、今回は改善されている。もともと場所は良いので、潜在的な需要はあるのではないかと思う。

(委員)

広報については配架箇所を22箇所増やすなど工夫はされている。

(事務局)

中京いきセンについては、評価委員会でも指摘してきたSNSによる情報発信に昨年度から取り組まれており、チラシに二次元バーコードを掲載するなど、SNSも積極的に活用されている。このような周知方法を工夫する中で、口コミなどもあり利用者が増えてきているのではないか。

(委員)

全体的にイベントの参加者が伸びてきている。協力団体も増えてきている印象。大学生とも連携して改善している。参画していただくとそこから派生して良い化学反応が起こるというの

は中京いきセンをみていると分かるような気がする。SNS 等の広報ツールを作っており、今後さらに連携していただき参画団体の増加を期待している。

(委員)

事業内容から公民館的なイメージを受ける。西側にはあまりいきセンがない中で、西側の地域の方がこのような活動に触れる、参加するという場を提供するという点では地域にとって求められている事業の一つのかたちではある。

(委員)

各事業において、活動団体の自発的な活動をサポートするという中間支援機能となることを努力されておりこの点は評価できる。

＜東山いきいき市民活動センター＞

(委員)

東山いきセンは、全体を通してアイディアが豊富というか、地域自体の人やものの持っているリソースの自主性を喚起し、その良さを引き出してイベントを開催しているところが素晴らしい評価したい点である。

地域の広報物、ウェブマガジンを作るというのは面白い取組であると思う。広報のページビューが伸び悩んでいる感じなので、その点の工夫に期待したい。

(委員)

東山はメディアに強く、企画広報が面白い、人を発掘しそれをウェブ配信に合わせるというのも面白い。

(委員)

関連する事業間の連携や他センターとの連携に意欲的であり、限られた資源の中でオンラインをいかに取り入れていくのかといるのは他のセンターにとっても参考になると思う。今後の更なる展開に期待したい。

＜下京いきいき市民活動センター＞

(委員)

下京いきセンが発行しているフリーマガジン「Carre」は現代的な課題である SDGs、レジリエンス、まちづくりを上手に掛け合わせ、地域に住んでいる方に焦点を当てて深いところまで取材をしていると感じる。引き続き良い記事を作っていただきたい。

SDGs ダイバー育成支援事業では、コロナの拡大で当初の予定どおりできなかつた点はあるが、それにも関わらず市民による主体的なプロジェクトが生まれたのは、当事者意識の下にプロジェクトができており良い。また、年齢層も幅広いので引き続き頑張っていただきたい。

他にもセンターそのものを多世代交流拠点にしようという取組も地道に、着実に実施されており、引き続き取り組んでいただきたい。

(委員)

SDGs ダイバー育成支援事業の地域課題解決プログラムでいわゆる地場産業と工芸大や市立芸大などとクリエイトしていく方が集まる地域で繋がりができる取組が面白い。地域を支えてきた方と一緒に取り組むのも良い組み合わせである。

(委員)

下京いきセンの取組が収穫期に入ったという感がある。運営主体が3か所の運営をしており、ソーシャルビジネスが得意である。そのあたりの経験等が十二分に活かされているのではないか。

＜吉祥院いきいき市民活動センター＞

(委員)

オンライン化に取り組んでおり、六斎念佛については天満宮で演じたものをアーカイブ化できた。アーカイブ化により演じる方のモチベーションも上がるのではないか。吉祥院のこれまでの事業は大人数で集うものが多かったので、コロナ禍では制限がかかり難しかったと思うが、Zoomなどを活用して上手に取り組まれたと思う。

昨年度からまちぶらマップを作成されているが、人の移動や大規模なイベントが制限されるコロナ禍では地域での情報を地域住民に提供するもの大事なことである。

(委員)

吉祥院は元々活動のコアとなる人材や団体があるが、取組をコアの方々で終わらせるのではなく、実行委員会化などにより周囲を取り込み拡大させている点が評価できる。

(委員)

ジャンボリーについては、やりたくて人はうずうずしているのではないか。従来と違う形にして従来とは違う人も巻き込めば良いと思うが、今までのジャンボリーにこだわらず、実行委員会が自立して運営できるように支援するなど、この点も検討しているということなので期待したい。

(事務局)

ふれあいジャンボリーについては第4期の事業計画において、実行委員会の自走化に向けて取り組むこととされている。

(委員)

吉祥院トーグで商店街の人が入ってきているが、商店街と地域が結び付くといろいろな課題が見えてくるのではないか。可能性を感じる取組である。

(委員)

次世代にどのようにバトンをつないでいくのかも課題である。

＜上鳥羽北部いきいき市民活動センター＞

(委員)

エコ、環境に特化している。コロナの前から変わらない姿勢を貫いてる一方で、インスタグラムやZOOMを活用した取組もされており対応は早い印象がある。若干、中年世代の取組がほしいところかもしれない。

(委員)

大学生のスタッフが新しく外部スタッフとして事業に入るなど、新しい取組もされている。次世代と接点を持とうとされているのは良い。

(委員)

とばベジマルシェなど地域性が出ていて面白い。地域を活性化したい団体等と連携して盛り上がりをいけるとより周知効果が出るのではないか。また、事業報告にある利用状況で、男性、女性、こどもと別れているのは良い。思ったよりもこどもが利用していることが分かる。

(委員)

上鳥羽北部は、センターの向側が児童館ということで子供の利用が多くなるのが特徴かもしれない。

＜上鳥羽南部いきいき市民活動センター＞

(委員)

上鳥羽南部いきセンについては、前回の委員会で協力者が偏っていること、高齢者向けの取組が多く参加者も高齢者に偏っていること、講座型が多いことを指摘したところである。

(委員)

多世代音楽交流という取組もされており、気持ちがあるのは分かるが。

(委員)

保育所が近くにあるので、連携した取組はできないかとの指摘もした。

頑張っているのは分かるし創意工夫も見られるが、報告書の写真を見てもまだ講座型が多い、双方向になっていない感はある。周辺は事業所が多く地域外から人を呼び込むことが場所的に厳しいとしても、もっと住民が持っているものを引き出すようなことはできないか。または住民が持ち込む企画を実現させようというスタンスが見えてもよいのではないか。このままだとカルチャーセンターになってしまうのではないか。市民活動の支援ではなくなってきたている。

(委員)

児童館の子どもたちと一緒にやっているものあるが、テーマ設定が自分寄り（高齢者寄り）である。新たな参加者と一緒に楽しめるテーマなどテーマ設定を変えていくということも必要ではないか。

(委員)

新しい参加者が加わることで化学反応が起こるといようなことはなく、予定どおり終わるという予定調和のようなことになっているのではないか。

(委員)

事業自体は一生懸命やっておられるのでもったいない感じはある。

(委員)

他のセンターのやり方などを研究されるのもよいかもしれない。

＜久世いきいき市民活動センター＞

(事務局)

今年度から始まる第4期からは貸館のみである。指定管理業務としての市民活動活性化事業はこの令和3年度が最後である。

(委員)

なぜ第4期は貸館のみなのか。

(事務局)

指定管理者からの聴取によると、提案事業である市民活動支援・活性化事業及びサロン事業については、基本方針を踏まえた第4期の仕様に対して十分に対応することが困難なためとのことである。なお、貸館については、これまでの利用者がいるのでしっかりやりたいとのことで貸館のみの応募となった。

(委員)

貸館については、近くに同じような貸館をしている久世ふれあいセンターがあるが、利用率の向上のためにはすみ分けや差別化の意識も必要となる。

(委員)

料金改定もあり貸館のみとなれば、より一層シビアになると思うが利用率向上に向けてしっかり取り組んでもらいたい。

＜醍醐いきいき市民活動センター＞

(委員)

スタッフの育成は特にしていることであるが。

(事務局)

醍醐いきセンは定期的に内部で会議をされているほか、醍醐支所のまちづくり推進担当やまちづくりアドバイザーとの連携もしっかりされている印象である。特にまちづくりアドバイザーとは企画段階から連携されている。さらに他のセンターから学ぶ姿勢や連携にも積極的でセンターとしての向上心は強いという印象である。

(委員)

取り組んでいる内容に比べて報告書の書きぶりが簡潔すぎるのではないか。「だいご de ワイワイ井戸端会議」では参加者からの発案で具体的な活動に発展した事業が6本も実施されるなど様々な素晴らしい事業を展開しているのにもったいない感じがする。

(事務局)

醍醐は「だいご未来プロジェクト」という大きなコンセプトの事業の中で複数のプロジェクトを実施するという事業のたてつけとなっているため、複数の事業の報告をまとめて簡潔に記載されていることによるものもあると思われる。

(委員)

自分から積極的に様々なことに興味を持って実行する突撃力は市民活動支援において非常に重要な要素でありセンターの姿勢として大事なことである。事業の内容は素晴らしいと思われるが、写真からその内容や参加者の様子などが伝わりにくい。もう少し全体の様子が分かるようなアングルの写真があった方がよいのではないか。

(事務局)

事業の様子や全体像が分かりやすい写真や資料などで追加提出できるもあるか確認することは可能である。

(委員)

次回委員会での追加提出で良いのでお願いする。

＜伏見いきいき市民活動センター＞

(委員)

伏見いきセンは大学との連携に力を入れており、副センター長が大学生である。

(委員)

今回特筆すべきと思ったのは、働く現役世代をどのように市民活動に取り入れるかを始めるに当たり、かなり本格的に調査、研究し、その結果を具体的な数字満載の冊子にまとめたこと。私個人としても非常に勉強になった。これだけの潜在層がいるという結果を受けて、実際の活動に取り入れていくのか、マッチングをどのように機能させていくのかに注目したいが、この冊子をまとめたこと自体がすごいこと。

働く現役世代の市民活動への取り込みはどのセンターにとっても課題であり、どこのセンターにとっても参考になるデータと思う。

(委員)

これまで見えてなかつた部分が可視化されており、非常に分かりやすい。

(委員)

調査手法についても Google フォームを使うだけでなく、FAX や書面も併用するなど IT が得意でない方にも配慮して行われており、満遍なく意見を拾えているのではないか。受け入れる側も大変等のシビアな意見もある。そのうえで上手くいっている事例が書かれているなど読み応えがある。

(委員)

貸館についても前年度比 98% と地域の貸館として底堅い感じがする。

以上